



IPSJ Magazine

[巻頭コラム]

世界とつながる技術

■ 杉山 愛

4歳でテニスをはじめ、17歳でプロテニスプレイヤーになりました。プロテニスプレイヤーの生活というのは国内だけで試合をすればいいというのではなく、年間250日にも及ぶワールドツアーを転戦していくというものです。

私の場合はジュニアの頃から海外で遠征をしてきましたが、世界を舞台に戦うということは日本人にとってはアウェーの環境ばかりになります。一般的には言葉の壁、文化・習慣の違いから余計なストレスを抱えてしまいます。

海外に出るようになって、多くの日本人は日本人同士で固まって過ごす傾向にありました。私の場合は、「せっかく海外に来たんだから、もっといろんな経験がしたい」という想いで外国人選手の輪の中に身振り手振りで入っていきました。もちろんすべての会話が理解できるわけではありませんが、それでも仲良くなれるものです。そうして知り合った外国の友人と日本に帰っても手紙で文通をしたりしました。当時はインターネットはおろか、携帯電話もまだ普及していなかった時代です。英語の辞書を片手に、母に聞いたりもしながら一文一文心をこめて綴ったものです。やっとの想いで書き上げた文章を送っても、当然時差もあるしすぐに返答を読めるわけではありません。また返答が来たところで日本語のようにすらすら読めません。辞書を片手に一語一語じっくりと紐解いていくのです。一生懸命読み解くわけだから、意味が理解できたときの喜びもひとしおです。もちろん子供なので書いてある内容なんて他愛のないことです。それでも、外国の人と心を通わせることのできる喜びを私は

■ 杉山 愛
スポーツキャスター／元プロテニスプレーヤー

15歳で日本人初の世界ジュニアランキング1位に輝く。グランドスラムでは女子ダブルスで3度の優勝と、混合ダブルスでも優勝を経験し、グランドスラムのシングルス連続出場62回の世界記録を樹立。オリンピックには4回連続出場。2009年10月、東レパンパシフィックオープンを最後に現役を引退。情報番組のゲストコメンテーター、グランドスラムのスペシャルコメンテーター&解説等で活躍。杉山愛ジュニア育成基金を立ち上げ、16歳以下の女子選手をサポートする『Road to Grand Slam』プロジェクトを始動させる。著書『勝負をこえた生き方』。



こうして学びました。それはとてもアナログなやりとりでした。だからこそ、私はそこにコミュニケーションの温かさを感じました。それは文明的にそうせざるを得なかった経験があるから私の中には感覚として蓄積されました。

もし当時からEメールがあつて、インターネットで何でもすぐに翻訳できて、タイムリーにやりとりができたとしたら、私の中のコミュニケーション感覚は少し違ったものとして形成されていたかもしれません（それはもっとクリアで洗練されていたものだったかもしれませんが）。ITが進化した現代でも、そうした経験があつたおかげで新しい技術に自分を合わせるのではなく、自分に合わせて技術を使うことができるような気がします。

かくいう私も今ではEメールを使いますし、LINEやskypeもします。世界中にできた友人に気軽に連絡できるし、いつでもつながっていると感じられます。私が海外遠征に出はじめた頃と比べると、はるかに世界が小さくなった気がするし、異国の人々が身近になったと思います。それでも私はアナログなやりとりをしていたからこそ、今の技術が当たり前になっても、地球の裏側にいる友人からメッセージが届くことに感動することができるのです。

